

— 追悼 — まど・みちおさん 故郷からありがとう

— 80年前の少年時代に帰った日のおはなし —



1998年(平成10)10月5日 的寄天神(周南市福田寺原) まど・みちお夫妻

ある秋の昼さがりの寄天神。さつきから鳥居に石を投げあげ願掛けする老夫婦

まど・みちお(石田道雄)さん88歳、寿美さん82歳。そこは幼き日、まどさんが祖父と二人、祖母のねむる福田寺に参る途中、一息ついた場所だった。その日も墓参で遠く川崎から帰郷し、たまたま立ち寄った時の出来事——。

まどさんはこの徳山(現・周南市)で9歳まで育った。父が台湾に仕事をもとめ、母、兄、妹がそれに続いた。まどさんは生家に残された。この時、母に置いて行かれたというショックは5歳の心を締め付けて離さなかった。祖母はすぐに他界、その後の3年半は祖父と二人だけの生活になった。

そんな捨て鉢になったまどさんの心を癒したのが生家周辺に広がる自然であった。里山に遊び草花や虫や動物と触れ合うことで、その感性はしだいに研ぎ澄まされていった。

なかでも頼りにしていた祖父との思い出はつきない。せつなく寂しい日々にもキラリと光る瞬間があった。大人や世間のことも教えてくれた。とりわけ菩提寺となる福田寺の話にはその奥深さに圧倒される。

お祖父さんが枯れたお花を捨てに行かれれば、私は竹筒に水を注いだ。ドレミハソシドレミハソラシと、土の底から雲の遠くへ昇っていくものがあつた。とり残されたもののように、私は耳を澄ますのだつた。

(「お墓まわり」より一部抜粋)

筒状のものに水を注ぐと、笛のようにドレミハと聞こえることがある。普通の人ならそのまま見過ごすのに、まどさんはそこに天までとどく永遠に鳴り続ける音階を感じたのだつた。連続性の発見。それはすでに子どもの域を超えていた。未来の詩人としての創造の世界が広がり始めていたのである。

しかもそこは祖父と二人、人気のない墓地のこと。すでに死生観さえも目覚めていたとしたらこの徳山時代、詩人としての骨格はほぼ出来上がっていたのかもしれない。

——さて、久しぶりに見る鳥居は思ったより小さく映った。徳山を出て80年。その間、ひたすら言の葉を紡ぎ続けてきた。童謡「そうさん」「一ねんせい」になつたら、「詩「クジャク」「ぼくがここに」など。子どもたちにも解かる言葉でその深淵なる世界観を創りあげた。そしていつしかその道の父と慕われる存在に……。

そして今日、平成10年10月5日、祖父と訪れた鳥居の下に愛妻とあそぶ幸せ。幼き日の自分と交信できる幸せ。時を超えてたしかに何かが連なっている。こんな何気ない日常にも永遠は潜んでいたのである。

心残りはこの日が故郷の土を踏む最後となったことである。

今年2月28日、まど・みちおさんは童謡と詩と絵を宇宙のみんなに残し、静かにその「窓」を閉じられました。104歳。長い間お世話になりました。安らかに眠りください。

(周南市美術博物館館長 有田順二)

まど・みちおさんふるさとからありがとう

— まどさんと周南市と周南市文化振興財団 —



二月二十八日、周南市出身の詩人、まど・みちおさんが亡くなりました。享年一〇四歳でした。
周南市—明治四十二年（一九〇九）当時は徳山町—は、まどさんが生まれ幼少期を過ごした場所です。
美術博物館や文化会館から三〇〇メートル東の西辻にまどさんの生家跡があり、近くの福田寺川（東川）
周辺は、幼いまどさんの遊び場所でした。

三歳の時に父が、五歳の時に母と兄妹が台湾へ行った後、まどさんは九歳まで祖父と二人きりで徳山で暮らしました。寂しかったこの時期、小さなもの、かすかなものにまどさんは心を寄せ、生まれながらに持っていた感受性はより研ぎ澄まされ、豊かになっていきました。まどさんにとって徳山の暮らし、徳山の自然は忘れることのできない思い出だったことでしょう。

まどさんが詩人として名を成し、まどさんの作った歌は、日本中で歌われるようになりました。そうした中で、まどさんのふるさと周南市に住む私たちは、さまざまに形でまどさんに親しんできました。市と文化振興財団も、まどさんと深いお付き合いを重ね、まどさん—それはまどさんの詩であり、まどさんの歌であり、まどさんの絵であり、まどさんご自身のお人柄であり—を多くの人に伝えるよう力を注いできました。

まどさんが天に召された今、もういちどそのことを思い出しながら、在りし日のまどさんを振り返っていききたいと思います。

周南市は平成十五年（二〇三）徳山市・新南陽市・熊毛町・鹿野町が合併して誕生しました。本稿では合併前については徳山市で記載しています。

徳山市文化振興財団の設立と文化会館開館

昭和五十六年（一九八一）、徳山市文化振興財団が設立され、翌五十七年に徳山市文化会館が開館しました。この頃から市全体でまどさんを顕彰していこうという運動が活発になっていきました。

■母校で講演

昭和六十一年（一九八六）徳山市立中央図書館で「まど・みちお資料展」が開催され、同館児童室に「まど・みちお文学コーナー」が開設しました。まど



徳山小学校で子どもたちと語らうまどさん

■ぞうさん詩碑

平成四年（一九九二）十一月七日、長年の功績により徳山市民文化栄誉章が贈られました。また動物園前に文化振興財団によって「ぞうさん詩碑」が設置されました。



ぞうさん噴水

また平成二年（一九九〇）にはぴーえっちどおりに「ぞうさん噴水」が完成しました。



ぞうさん詩碑の除幕式

■まど・みちお

こどものうたフェスティバルと「コスモスのうた」

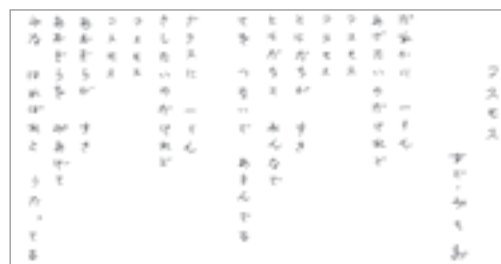
この日にはまた、文化会館開館十周年を記念して「まど・みちおこどものうたフェスティバル」が開催されました。



「まど・みちおこどものうたフェスティバル」第1部シンポジウム



第2部ファミリーコンサート
左から眞理ヨシコさん、山本直純さん、
一人おいてまど・みちおさん



まどさんから贈られた「コスモスのうた」の原稿

第一部「シンポジウム」ではパネリストとして安野光雅、長田暁二、阪田寛夫、谷川俊太郎、山本直純の各氏が参加、第二部「ファミリーコンサート」には山本直純、眞理ヨシコ、森みゆき、ボニージャックスの皆さんが出演、まどさんも舞台に上られました。

このコンサートのために、まどさんはふるさとに向けて「コスモスのうた」の詩を書いてくださいました。この詩に山本直純氏が曲をつけられ、コンサートで初披露されました。文化振興財団は「コスモスのうた」にちなんで、以後毎年、「まど・みちおコスモス音楽会」を、まどさんの誕生日に合わせた十一月に開催しています。



平成5年
第1回まど・みちコスモス音楽会



美術博物館の献花台に供えられたメッセージカード
「四方の窓ゆ 聞こえくるは幾多の詩 ひょうひょうと流るる 周南の道を まどさんありがとう」と書かれています

『まど・みちお全詩集』と『THE ANIMALS』そして「国際アンデルセン賞」

平成四年（一九九二）、一一〇〇篇の詩を収録した『まど・みちお全詩集』（伊藤英治編集）と、美智子皇后陛下が英訳された『THE ANIMALS』が刊行されました。『まど・みちお全詩集』は翌年、第四十三回芸術選奨文部大臣賞と第四十回産経児童出版文化賞大賞を受賞しました。

また平成六年（一九九四）まどさんは、「小さなノーベル文学賞」と言われる第二十回国際アンデルセン賞作家賞を受賞しました。日本人として初の作家賞でした。

十一月、徳山市で「国際アンデルセン賞受賞を祝う会」が開かれ、まどさんとご家族のほか、詩人の阪田寛夫さん、編集者の伊藤英治さん、市河紀子さんが出席されました。またご親戚も集まり、まどさんの受賞を祝いました。



文化会館では「国際アンデルセン賞受賞記念まど・みちおコスモス音楽会」が開催され、岐山小学校前の国道に地下道「ボエムどり」が完成しました。「ぞうさん」の楽譜のレリーフがあり、人が通ると「ぞうさん」「一ねんせいになったら」などの曲が流れます。

美術博物館開館

平成七年（一九九五）九月、徳山市美術博物館が開館しました。まどさんはこの開館記念式典にご夫妻で出席、テープカットをされました。



左から二人目がまど・みちおさん
右端は当時の小川亮徳山市長

同時期、文化会館で「まど・みちお絵画展」を開催、まどさんが描いた絵画六十五点を展示しました。

まどさんの絵画を収蔵

平成七年（一九九五）、徳山市は「ぞう（さん）」「きりん」などの絵画作品一〇点を購入、さらに平成十一年（一九九九）には、まどさんから絵画作品やカットなどの絵画資料二八〇点が寄贈されました。これにより美術博物館には、まどさんが描いた絵画の大部分が収蔵されることとなりました。

館では機会あるごとにまどさんの絵を展示し、広く紹介しています。



【上】ぞう（さん）
昭和52年（1977）7月
【左】「新児童文化」第5集カット
昭和25年（1950）5月

最後のふるさと訪問

平成十年（一九九八）十月、まどさん夫妻が徳山市に帰郷、お墓参りをしました。まどさんがふるさとを訪れた、これが最後となりました。



平成10年（1998）10月5日
徳山市に帰郷、的崎天神にて寿美夫人と

まるみぞうさん詩碑



平成十五年（二〇〇三）周南市の誕生を記念して、周南市立徳山動物園に「まるみぞうさん詩碑」が設置されました。まどさんが平成六年に動物園を訪れたときに即興的に詠んだ詩が刻まれています。

親しまれるまどさんの絵

平成十七年（二〇〇五）美術博物館で「まど・みちおの世界——絵画展と詩の朗読」を開催しました。図書館の利用カードにも、「ぞう（さん）」の絵が使われるようになりました。



まどさん200歳

平成二十二年（二〇一〇）十一月十六日、明治四十二年生まれのまどさんは一〇〇歳を迎えました。周南市でもさまざまなお祝いの行事が行われました。

美術博物館では十一月十四日から十二月二十七日まで「まど・みちおえてん ある詩人の100年の軌跡、童謡・抽象画・詩」を開催、収蔵作品すべてを展示し、まどさんの絵画世界を紹介しました。

また文化会館では、十一月十四日に「NHKふしぎなポケットコンサート」、また十二月六日に講演＆シンポジウム「まど・みちおえてん」会場



周南市美術博物館
「まど・みちおえてん」会場

毎年文化会館で開催する「まど・みちおコスモス音楽会」や、美術博物館での絵画展、さらには子どもたちに、まどさんが幼少期を過ごした場所を紹介するなど、ふるさとが生んだ偉大な詩人、まど・みちおさんを顕彰するための活動を、これからも続けていきたいと考えています。



まどさんが幼い頃、おじいさんと一緒に
お墓参りをした福田寺にて
まど・みちおさんと長く親交のあった
有田順一美術博物館館長（当時は副館長）
による解説

ふるさとに愛されるまどさん

まど・みちおさんが「ぞうさん」や「一ねんせいになったら」などたくさん童謡の作詞をされたことはよく知られています。しかし文化振興財団はそれだけでなく、まどさんの詩の心を育んだ幼い日のことや、まどさんの芸術世界について広く理解してもらいたいと思っています。

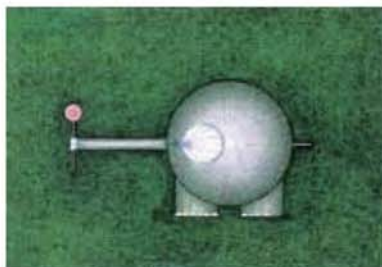
また「こどもの詩周南賞」が創設され、作詩部門と作詩・作曲部門に多くの作品が寄せられました。入賞作は、翌年十一月「こどものうたフェスティバル」で披露されました。

この他にも、市民団体によるコンサートや絵画展などが開かれ、周南市全体でまどさんの一〇〇歳をお祝いしました。



周南市文化会館 「NHKふしぎなポケットコンサート」

とうさん
ー かえうたー
とうさん
あはなが へちゃんこね
そうよ
かあさんと
へちゃんこも
とうさん
とうさん
だれが すきなの
あのね
かあさんが
すぎなのよ



そうさん 1977年 周南市美術博物館所蔵

まど・みちお
1907.7.5

まど・みちおさんの「いま」

— もう、聞かれましたか『とうさんー「そうさん」かえうたー』 —

ご存知でしたか

国民的愛唱歌『とうさん』で知られる詩人まど・みちおさんが、昨年暮、『とうさんー「そうさん」かえうたー』を発表されました。

子どもたちが、それぞれの思いを『とうさん』の替え歌にして楽しんでいるのを見て、自ら作詞されたそうです。

宮川彬良さん作曲のゆつたりとしたメロディーは、この『とうさん』にもほどよくマッチし、ほのぼのとした夫婦の語らいやその情感さえも伝わってくるようです。

元歌の『とうさん』が母と子の愛情を歌ったものならば、『とうさん』は夫から妻への愛情を歌ったもので、おそらく長年連れ添った最愛の妻、寿美さんのために書かれたものではないかといわれています。

明治42年生まれですから現在98歳。今なお瑞々しい感性は衰えることがなく、毎日机に向かい、その詩心を紡ぐのが日課です。

10歳の時に徳山を離れ、遠く台湾に渡り、台北工業学校卒業後は、台湾総督府に就職、そこで運命的な出来事がおこります。

25歳の時、北原白秋が選者の『コドモノクニ』童謡募集に初応募し、見事、特選に輝きます。その後は、戦争や戦後の混乱そして現在へと時代は目まぐるしく変わりましたが、ひたすら詩作を続け、『とうさん』『やぎさん』『ゆうびん』『ねんせい』になったら』など数多くの心に残る童謡や詩を世に送り出してきました。

まどさんの世界は、人間だけではなく、蟻も、リンゴも、雲も、そして地球や宇宙さえもみんな同じという「ともに在る」という考え方が根底に流れています。それを中心にユーモアや笑いなどさまざまな要素が混ざり合いその独特な世界観ができています。

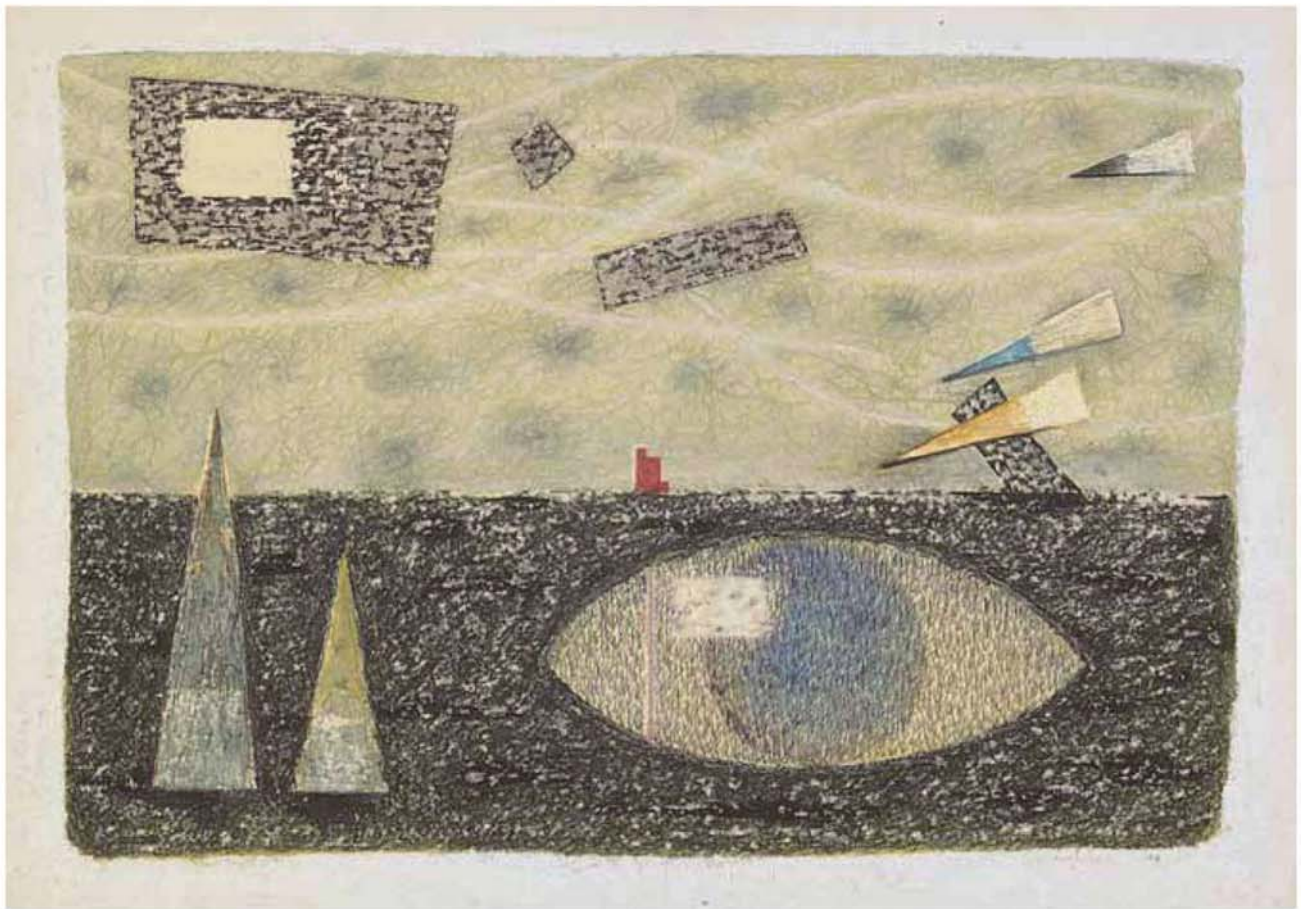
さて、周南市美術博物館では、そのまどさんの描かれた絵画や下書きなど290点を収蔵しております。平成7年からコレクション展示室を中心にこれまで12回公開してきましたが、いかがでしたか。

詩人と絵画、一見、結びつかないような思いますが、まどさんにとって絵を描くことは、まさに自らを癒すものであり、同時に新たな思考や表現を生み出す原動力ともなっています。すなわち、まどさんの絵は、まどさんの童謡や詩の解説装置といってもいいのではないのでしょうか。

また、近年は、その絵画への質問はもろろんですが、「まどさんで、どんな人」「今なにをされているの」など、直接まどさんのことが知りたいという声が増えてきました。

美術博物館では、今後もまど絵画の公開は続けてまいります。まどさんの近況や最新の作品などについても随時紹介し、みなさまのご要望にも応えていきたいと考えています。まどさんの「いま」にご期待ください。

(周南市美術博物館 有田順一)



鳥のくる池 1961年 周南市美術博物館所蔵

まど・みちおさんの「原風景」

— 祖父と暮らした4年間。孤独のなかで何かがはじけた… —

まどさんの詩や童謡は、ふるさとの原風景やそこの生活体験が、基になっているといわれています。

その一端を垣間見ることが出来るのが、まどさんが散文詩としてまとめられた「幼年遅日抄」です。

まどさんは、明治42年、徳山町辻(現・周南市辻町)に生まれました。しばらくは、祖父、祖母、父、母、兄、妹と一緒に暮らしていましたが、父が将来の生活を考えて大正元年、新天地、台湾へとわたりました。そして、苦勞の末、警察電話の技術者に採用され、大正4年、母が兄と妹を連れてそれに続きました。

4月のある朝、目をさますと家の中がひっそりしています。

「これをみちおに食べさせて」。そこには、赤と青の高価なおまんじゅうが置いてありました。母たちは、まどさんが寝ている間に出版していたのでした。何も告げられずに一人残されたまどさん。この置き去られたという衝撃は、5歳の少年の胸を締め付けてはなれませんでした。

次の年には、祖母が亡くなり、ついには祖父と二人きりになってしまいました。孤独と不安に苛まれる日々が続きましたが、何かが萌芽する前ぶれでもありました。そして大正8年、9歳でまどさんも台湾にわたるのですが、この祖父との4年間の心の機微を大人になって回想したのが「幼年遅日抄」です。

「鉛筆」「豆ランプ」「髯もじやもじや」「お墓まいり」「バナナ」などの短編で、普通、感情を表に出さないまどさんのモノの見方や考え方がストレートに伝わってきます。そういう意味において、まどさんの世界観を読み解くバイブルともいわれています。

それでは、当時のまどさんの行動範囲を見てみましょう。辻の生家を中心に、東は福田寺、風呂ヶ迫あたり、西は毛利邸、祐綏神社まで、南は母校である岐陽尋常高等小学校(現・徳山小学校)、北は興元寺あたりまでと、子どものことですからごく限られた地域だったと思われます。とくに一ノ井手から生家までの東川沿いは、格好の遊び場だったのではないのでしょうか。家での寂しさや劣等感から解放され、田畑や川辺での自然との語らいは、自己を癒すとともに、想像世界のなかを自由に泳ぐ楽しみすら見つけ出しました。

「その頃の私の五感が感じ取ったものが、いま私に詩らしきものを書かせている美意識の基礎になっていると思います」。どこにでもある小さな里地が、まどさんにとっては大宇宙になっていたのです。もうすぐ白寿。今も遠く川崎市の書齋で、90年前の少年にもどり、新たな発見や真理を綴る毎日です。

(周南市美術博物館 有田順二)

詩人
まど・みちおの

— すべてはここから。
まどさんの
生まれた場所 —

風景 生家跡 1



まど・みちお生家跡付近(2009年4月)

一角。
一見どこにもある住宅地の
見過ごしがちだが、自治会館、
駐車場、二階屋とつづく一帯に、
かつて、まどさんの生家があっ
た。

当時の地名は徳山町西辻（現
在・周南市辻町）といった。ま
どさんの誕生は、1909年（明
治42）11月16日。時代は明治ま
で遡る。このあたりは一面、田
畑が広がる里地であった。しか
し、生家沿いの道には

家々が建ちならび小さ
な商店も軒を連ねてい
た。街でも田舎でもな
い。生活するのには、
ちよつと良い環境であ
った。
さて、まどさんは、
父、母、兄妹。それに
祖父母と暮らしていた
が、5歳の時、父が将
来の生活を考え、まど
さん一人を祖父の母の
とへ残し台湾に渡って
しまう。「置き去られ
た」。その自己嫌悪に
なった少年の心を紛ら
わし、励ましたのが、
生家周辺に広がってい

た自然であった。やがて、まどさんに
「人も自然も物もみんな同じ」という
特別な価値観が芽生え始める。この
頃の体験が詩人まど・みちおの世界
観を育んだといわれている。そして、
9歳でまどさんも台湾へと旅立つて
いく……。その後生家は、1977
年（昭和52）都市計画によって姿を
消した。
顧みると、写真右隅の二階屋と同
じところに生家の2階があつたらし
い。まどさんは、そこから徳山湾の
夕焼けを見るのが好きだった。今も
昔も変わらないもの。それは、やは
りあの日と同じ真つ赤な夕焼けであ
る。
（有田順一）

絵手紙で伝えよう まどさん100歳おめでとう メッセージ募集中

今年100歳を迎える周南市出身の詩人まど・みちおさんに、おめでとうのメッセージを書いてみませんか。10/31まで受付中です。

官製はがきの大きさを、
はがきの表側に住所、氏
名、年齢、作品展示の際
の名前掲示の可・不可を
明記してください。

■あて先
〒745-0006
山口県周南市
花島町10-16
周南市美術博物館
「まどさん
100歳おめでとう
メッセージ」係



詳しくは美術博物館
ホームページへ

<http://www.shubunzai.or.jp/bihaku/>

ミニコラム ガス燈

文化会館前、美術博
物館横の桜並木。今年の
桜も、見事でした。写真
に記録しようと少し歩け
ば、足下の石畳も、目の
前に降ってくるのも、見
上げて、薄ピンク。し
ばし、我を忘れて見入ってしまいました。
夢よりも現実の方が美しいと胸に沁み
る瞬間。素晴らしい生の音楽や美術に
出会えたときにもそんな思いになりま
す。今この時、ここに自分が立ち会えて
良かった、としみじみと感じる瞬間です。
5月も素晴らしいアーティストたちの公
演に、林忠彦賞受賞記念写真展と、出
会いの場を多く用意しています。皆様
にそんな瞬間を二瞬でも多くお届けでき
れば。がんばってまいります。（M・K）



7月7日、岐山小学校・6年生とまどさんゆかりの地をめぐるしました。解説は筆者。福田寺山門付近。

詩人まど・みちおの

原風景

3

— 無限の音、
永遠の響きを発見 —

福田寺
ふくだんじ

まどさんの生家跡（周南市辻町）から旧道を北に上がり、幼稚園の手前を右に曲がると東川に出る。さらに橋を渡ると小さな道が四方にのび、崖つたいの道を北に進むとそこが福田寺である。今ではその面影もないが、当時は、東川までは彼岸花が咲き乱れ、橋を境にスカンボが群生していた。まどさんは、この道を祖父とともに墓参りに通ったのである。

福田寺は、江戸時代前期、金甫和尚が開いた曹洞宗の寺で、石田家の墓もここにあった。

まどさんは、5歳から9歳まで（大正4年から大正8年まで）父が仕事をともにめて台湾に渡ったことから、両親と兄妹は台湾で、まどさんは祖父父母のもと徳山で暮らすことになった。

「朝、起きると二人残されていた」。その置き去りにされた衝撃は今も脳裏に焼きついて離れない。そんな自暴自棄になるまどさんの心を癒したのが、生家沿いに広がる自然であった。逆境にあっても草木や虫や動物と触れあうことで、まどさんの感性はしだいに研ぎ澄まされていった。現在、詩人としてある発芽のようなものがあらわれてくるのである。

なかでも福田寺は、その象徴的な出来事がおこった場所である。

実は、祖母は別居してすぐに亡くなってしまふ。祖父と二人で祖母の墓に参るのだが、それは決まって物悲しい日暮時だった。山門から入り本堂の裏にまわると墓地があり、その一番奥に雑木林があった。その林の前に石田家の小さな墓があった。墓といっても現在のような立派な墓石ではなく、緑色の石ころが置いてあり、その前に竹でできた花筒が2本たっていただけである。その時の様子を、昭和15年に発表された「幼年遅日抄」からたどってみよう。

お祖父さんが枯れたお花を捨てに行かれれば、私は竹筒に水を注いだ。ドレミハソラシドレミハソラシと、土の底から雲の遠くへ昇って行くものがあつた。とり残されたもののやうに、私は耳を澄ますのだつた。（「お墓まあり」より抜粋）

ここで、ドレミハソラの表現に着目してもらいたい。確かに筒状のものに水を入れると瞬間、笛のような現象がおこることがある。しかし普通の人ならただそれだけのことで別に気に留めることはない。まどさんは、そこに音階を感じたのである。しかも天にとどくまで永遠につづく音階である。この繰り返しの連続性の発見は、すでに少年の自然観察の域をこえていた。まさにその先にある独自の創造世界が息づいていたのである。さらにいえば、そこは祖父と二人、人けもない寂びしい墓地である。もしこの年齢で、生死観が目覚めていたとしたなら、まどさんの骨格はこの徳山時代、すでに出来上がっていたのかもしれない。その、まどさんのすごい記憶によれば、このドレミハソラの発見は、大正6年、7歳頃というから驚きである。

（周南市美術博物館副館長 有田順二）

MADO MICHIO ART EXHIBITION

MADO MICHIO ART EXHIBITION IN SHUNAN CITY MUSEUM OF ART AND HISTORY.

まど・みちお えてん

ある詩人の100年の軌跡、童謡・抽象画・詩 —

2009.11.14 sat → 12.27 sun
午前9時30分～午後5時（入館は午後4時30分まで）

【休館日】月曜日

ただし11月16日（月）は、（まどさんの100歳誕生日）のため開館、

11月23日（月・祝）開館、翌日24日（火）休館

【観覧料】一般1,000円（900円）、大学生800円（700円）

（ ）内は前売および団体料金（20名以上）

会員で招待



「少女の顔」1961年

「まど・みちおえてん」は、詩人まど・みちおさんが描いた「え」にスポットをあてる初めての展覧会です。

そしてこの展覧会の中核になるまどさんの「え」は、故郷となる周南市の大切な財産です。今回は、展覧会を開催するにあたりこの「え」が、どのようにして故郷で収蔵されるようになったのかを、ご紹介いたします。

「まどさん」「やぎさん ゆうげん」など国民的愛唱歌で知られるまどさん（石田道雄）は、1909年11月16日、徳山町西辻（現・周南市辻）に生まれました。幼くして台湾にわたり、25歳ではじめて挑戦した童謡募集で、北原白秋に認められて以来、こころの「窓」をとおして、思ったことや感じたことを詩にたくしてきました。そのたおやかで精神性豊かな童謡や詩は、どれほどの人々が癒され励まされたか分かりません。そんな誰からも愛される詩人だからこそ、70歳を過ぎたあたりから、評伝や作品研究でも取り上げられるようになりました。その過程で、「え」を描いていることが分かったのです。

その「え」が一般にも広まったのは、1992年、周南市文化会館で開催された「まど・みちおこどものうたフェスティバル」の舞台で、「まど」きりん「くじやく」の「え」が大きく掲げられたのがきっかけです。これはNHKで全国放送され、その後いろいろなか所で紹介されはじめたのです。そしてこの頃から、たびたび故郷に「え」を納めたいというまどさんの思いが口をついて出てくるようになりました。

具体的に動きはじめたのは、1995年、周南市美術博物館が開館してからです。式典にも列席され収蔵庫で保存方法を説明するととても安心されました。そして、1999年、無事に寄贈がかない、現在、290点を収蔵しております。

内容は、全部が作品というわけではなく、作品の状態になっているものが、122点。残りの168点は、表紙絵やカット、それに紙の切れ端にかかれた下書きが主なものです。また、残念ながらご自宅で保管されていたので、退色や変色がひどく、描かれた時の色調をとどめないものもありました。

寄贈の理由は、感性を育んでくれた故郷に対して、何か恩返しをしたいという一念でした。しかしよくよく考えてみますと「え」を差し出すことは、わが子と別れるくらい辛いことだったろうと思います。

そして生家から一番近い保管場所として、美術博物館を選ばれました。直線200メートル程度ですから、現在、川崎にお住まいのまどさんからみれば、生家においておくのと同じような感覚ではないでしょうか。

その後、美術博物館では、作品保護のことも考えながら、まどさんの「え」を年1回ペースで少しずつ公開してきました。今回は15回目となりますが、まどさんの百寿のお祝いもかねて、はじめて全資料290点を展示いたします。また、本趣旨に賛同された個人所蔵家の方々からもさらに7点が追加展示される予定です。まどさんの「え」はその童謡や詩の解説装置と合わせて展示されます。ぜひ、今秋は美術博物館の方へ足をお運びになりまして、まどさんの「え」と直接対話していただければと思います。

（周南市美術博物館副館長 有田順二）

臨時休館のお知らせ

11月4日（水）～11月13日（金）は、空調工事のため臨時休館します。

MADO MICHIO ART EXHIBITION

MADO MICHIO ART EXHIBITION IN SHUNAN CITY MUSEUM OF ART AND HISTORY.

まど・みちおえてん

ある詩人の100年の軌跡、童謡・抽象画・詩

12月27日(日)まで開催中

午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)

〔休館日〕月曜日

〔観覧料〕一般1,000円(6,000円)、大学生800円(7,000円)

()内は前売および団体料金(20名以上)

ぞうさん

作詩 まど・みちお
作曲 酒田富治

優しく ♩ = 104

1. ぞうさん ぞうさん おはなが たかいね そうよ
2. ぞうさん ぞうさん だーれが すきなの あのね

かあ さん も な が い の よ
かあ さん が す き な の よ

この資料は「まどみちお 全詩集」の編集者である伊藤英治氏のご好意により提供いただいたものです。 JASRAC(出)0914975-901

童謡「ぞうさん」のこぼれ話 —二人の作曲家による二つの「ぞうさん」—

「まど・みちおえてん」を進めて行くうえで思わぬ発見がありました。まどさんといえは童謡「ぞうさん」ですが、現在歌われている3・4拍子の曲の前に、2・4拍子の曲があったのはご存知でしたか。この事実はまどさんの年譜にはのっていないのですが、その楽譜の在り処が分からず幻の曲になっていました。その楽譜がこの度見つかったのです。

それではまず童謡「ぞうさん」が、どのようにして出来たのかを追ってみたいと思います。1934年、まどさん(石田道雄)は、25歳で北原白秋に認められて以来、童謡の創作に没頭します。その後応召、南方戦線に従軍し、1946年に復員、川崎市に居を構えました。そして守衛の仕事を経て、1948年、先輩の詩人・与田準一の薦めで「チャイルドブック」創刊の編集者として迎えられる。混乱期のことですから、編集はおろか何でもこなさなければなりません。その過酷な現実にまどさんは疲れ果てていました。

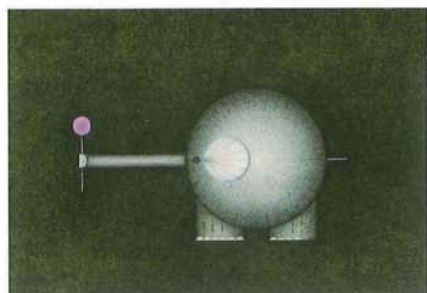
そんな最中、1951年音楽教育家・酒田富治から「幼児のうた」にのせる原稿依頼がきました。言われるままに6編を即興でかき、その1編が酒田富治作曲の童謡「ぞうさん」になりました。しかしこの曲は、旧来の童謡とおなじく唱歌調の曲でした。

後日、その「ぞうさん」がのった楽譜集をみた詩人・佐藤義美が、1952年まどさんの了解もとらずに、「おはながながいね」を「おはながながいのね」に改稿し、NHKに持ち込み今ある團伊玖磨の曲がついたのです。「ゾウの鼻が、ブラーリ、ブラーリとゆれる感じを出そうと、童謡じゃ当時型破りの3・4拍子にしてみました。それがかえって幼児には歌いやすくなったようだ」と團はその時を振り返っています。この「ぞうさん」は、後童謡の最高傑作といわれ今日まで歌い継がれる国民的愛唱歌になりました。まどさんは、白秋以来つづく詩に重きをおく芸術派童謡を標榜する詩人です。團の曲は、まさにその崇高な精神性を見事に引き出したからこそ名曲と呼ばれるようになったのではないかと思います。

一方、詩の方ですが、友人の阪田寛夫は、「童謡でこい」の後書きで、まどさんのひとつの見解を披露しています。「あの歌は、動物が動物として生かされていることを喜んでいる歌なのです。」「お鼻が長いね」と悪口を言われた象の子が、「一番好きなお母さん」も長いよ」と誇りをもって答えたのは、象が象として生かされていることが、すばらしいと思っているからなのです(部分)。まさにまど文学の特徴である「自分であることを喜び、他者とともに共生することを喜ぶ」という理想の世界観がそこに込められていたのです。

もしあの時、佐藤義美が、「ぞうさん」の曲に反応していなかったら、現在も酒田の曲が歌われていたはずですが。名曲の陰にエピソードありといいますが、今となつては新旧の曲を聞き比べてみるのも面白いかもしれません。「ちよつとした弾みがその運命を大きくかえる」。佐藤義美も卓越した感性の持ち主で、「ぞうさん」を最初に評価した詩人になりました。

(周南市美術博物館副館長 有田順一)



「ぞう(さん)」1977年7月/周南市美術博物館蔵

MADO MICHIO ART EXHIBITION



フジ子さんが、自らポーズをとってくださいました。2009年11月

MADO MICHIO ART EXHIBITION IN SHUNAN CITY MUSEUM OF ART AND HISTORY.

まど・みちお え てん 余話

まどさんの「え」に感激～魂のピアニスト、フジ子・ヘミングさん

新年明けましておめでとうございます。

旧年中に開催した生誕100年記念「まど・みちおえてん」では、まどさんを敬愛する多くの方々のご支援ご協力を賜り、成功裏のうちに無事閉幕することができました。あらためて深く感謝申しあげます。

その会期中に心温まる出来事がありましたのでここにご紹介させていただきます。

それは2年前の春、周南市文化会館を歓喜の渦に巻き込んだ魂のピアニスト、フジ子・ヘミングさんの突然の来訪でした。

会場では、「すばらしい色彩感覚ね」「すごく広がりがあるわ」と嬉嬉とした声が響いていました。近くにいられたので、どうしてもまどさんの絵をみておきたかったそうです。

フジ子さんはベルリン生まれ、その後母方の国日本に帰国、6歳からピアノをはじめました。16歳の時、中耳炎がもとで致命傷となる右耳の聴力を失いますが、青山学院高等部時代に早くもデビュー、東京音楽学校（現・東京芸術大学）卒業後は本格的な演奏活動に入りました。30歳でドイツに留学、ベルリン国立音楽学校を経てさらにキャリアを積み重ねます。その才能は20世紀最大の指揮者ブルーノ・マデルナやレナード・バーンスタインからも絶賛されました。そして1970年晴れ舞台となるウィーンでのリサイタルを前に風邪により左耳の聴力も失い、ついには両耳とも聞こえなくなってしまう。その後の演奏会は全てキャンセル、音楽界から忘れられていきました。その後、幸い左耳が聞こえはじめ現在は40パーセント程度回復しているそうです。1995年母の死を機に日本に帰国、長い間、人前での演奏は控えていましたが、「もう一度人生を取りもどしたい」と活動を再開します。そしてその壮絶な人生をえがいたNHKのドキュメント番組「フジ子」あるピアニストの軌跡」が放映されると一気にブレイク、今日に至っています。そんなフジ子さんですが、実は絵も描かれています。小さい頃から日記を綴るように独自の世界観を絵にしてみました。それは一方では、音楽人生に行き詰まった日々をどれだけ癒したのかわかりません。愛くるしい図柄で、まるで音楽が聞こえてくるようです。

フジ子さんの魅力は、聴覚に障害をもちながらも奇跡の復活を果たしたその強靱な精神力にあります。それは筆舌に尽くしがたい並大抵の努力ではなかったものと思われれます。そして演奏の真髄は奏者の人生観や宗教観が大きく関わってきます。

「自分より困っている誰かを助けたり、野良犬一匹でも救うために人は命を授かっているのよ」。フジ子さんの奏でる音だからこそ、何人でもさえも感涙を抑えきれなくなるのではないのでしょうか。

「純真無垢」。フジ子さんやまどさんに会うとしみじみと感じることです。おふたりはピアニストや詩人であるまえに天使そのものでありました。

（周南市美術博物館副館長 有田順一）



フジ子さんの描かれた画集

まど・みちお え て ん

ある詩人の100年の軌跡、童謡・抽象画・詩 ——

ご観覧
ありがとうございました。

昨年11月14日から開催していた「まど・みちお え て ん」が12月27日、盛会のうちに終了しました。詩人として世界的にも高く評価されているまど・みちおさんの100歳の誕生日を記念した展覧会では、あまり知られていない絵画作品に、たくさんの方が「まどさんの世界」を感じられたのではないかと思います。



絵手紙で伝えよう まどさん100歳おめでとうメッセージ



展示風景



石田京さん
による選考

まどさんの100歳をお祝いする絵手紙を募集し、最終的には1,158通、遠くはアメリカやフィジーなど海外からも届きました。12月5日にまどさんの長男・石田京さんに優秀な作品を選考していただきました。応募された絵手紙はまどさんへお送りします。たくさんのご応募ありがとうございました。

グッズコーナー

まど・みちおさんの詩集や、展覧会にあわせて制作したオリジナルグッズなどが並び、大勢の方で賑わっていました。



詩のセミナー「まどさんとユーモア」



「まどさんとユーモア」と題し、まど・みちお詩集の編集に携わった編集者の市河紀子氏のセミナーが行われ、最新刊『のぼりくだりの…』を制作中のまどさんとの心あたたまる話などに、多くの方が聞き入っていました。

リ・コーダーズによる 「詩の朗読&コンサート」

11月29日、小学校の先生5人の「リ・コーダーズ」による5種類のリコーダーを使った演奏と、まどさんの詩の朗読が行われました。ロビーに響く綺麗な音のハーモニーを大勢の方が熱心に聴いていました。



ミニコラム ガス燈

2010年。新しい年が幕を開けました。牛さんから虎さんへバトンタッチですね。今年はどうな年になるでしょう。

周南市美術館博物館は、昨年（2009年）は思えないほど、あわただしい年でした。特に11月中旬から始まった「まど・みちお え て ん」では早い時期から準備に取りかかり、図録作りでは内容に誤りがないか、誤字脱字がないかなど、毎日遅くまで激しい校正の嵐が続きました。色校正では、実際の作品と図録用の印刷見本を見比べ、出来る限り実物に近づけるよう印刷会社の方と何度もやりとりして合わせていきました。その過程で特に気を使ったのは、微妙な色の違いを言葉で伝える事でした。色の場合は、同じ青でも、グリーンがかった青や瑠璃色の青、また淡い青から濃い青まで、少しの違いで絵全体の印象が大きく変わるので、微妙な三

クリスマスサロンコンサート



12月19、20日にはクリスマスサロンコンサートが開催されました。山口芸術短期大学の学生、OGにより、クリスマスにちなんだ曲や、まどさんの歌をアレンジした曲が演奏されました。



「まど・みちお え てん」カタログ 28×20センチ・164頁

MADO MICHIO ART EXHIBITION IN SHUNAN CITY MUSEUM OF ART AND HISTORY.

まど・みちお え てん 余話Ⅱ

— 本展カタログが、美術館連絡協議会の2009年「優秀カタログ賞」を受賞しました。

みなさん、覚えておられますか…。

昨秋、美術博物館では、詩人、まど・みちおさんの100歳の誕生日を祝い、「まど・みちお え てん」を開催しました。あの《ぞうさん》《きりん》《くじやく》の絵が一堂に会した展覧会です。これは彼の故郷である周南市が全国発信したもので長年の悲願でもありました。連日、マスメディアにも取り上げられ、あらためて彼が国民的詩人であるのを実感した記念すべき展覧会になりました。

そして今春、本展にかかわる嬉しい知らせが入ってきました。そのカタログ（図録）が、全国の公立美術館でつくる美術館連絡協議会（理事長＝酒井忠康 世田谷美術館長）の2009年優秀カタログ賞に選ばれたのです。地方美術館の自主企画展という小さな世界が、中央においても評価されたことに、一同、たいへん喜んでおります。

ここで本展についてすこし振り返ってみたいと思います。

90年代、彼の絵は童謡「ぞうさん」に代表される詩の陰に隠れ、知る人ぞ知るといって存在でした。当館はそんな時代、95年に開館します。そしてその未知の状態にあった彼の絵画資料290点全てをありがたく受け入れたのです。その後は、様々な出版や展覧会が続きましたが、いずれも詩が主体で絵は付属物にすぎませんでした。

そして生誕100年を控えて、彼は時の人になっていました。そこで当館では、意を決し、絵を主体に、絵から詩の世界を覗いてみようと思案の開催を決めたのです。

しかし、それは不測の事態の連続でした。著作権管理が息子さんに移った直後で、関係資料の所在が分からず、さらには長年補佐役を務めた編集者が病に伏すなど、借用計画が立ちませんでした。時間も迫り、当初案は断念。そこで絵画資料の中で最も謎に満ちた抽象画を中心にもってくることにしました。

これは、彼が童謡詩人から詩人へ移行する60年代、51歳から55歳までの3年半、集中して描いたもので、現在120点が確認されています。内面世界が広がる不可思議な抽象世界。しかしそれは完成か、未完成かわからない、彼が口を閉ざして語らない難物でもありました。最終的には、20数年来の親交で蓄えた彼の言動と周辺取材で埋めていく手探りの旅となりました。

そして本展の開催、今回の受賞にとつながるのです。さらに嬉しい知らせは続きます。

今夏、8月21日から10月3日まで、現在まどさんがお住まいの川崎市でも、同パージョンの「まど・みちお え てん」（会場＝川崎市市民ミュージアム）が開催されることになりました。芸術文化の先進地、川崎市からの招致は、当館のこれまでの姿勢が川崎市、そして、まど（石田）家からも認めていただいたものとたいへん感激しております。

まど・みちお顕彰活動や調査研究は、郷土を愛し文化振興に対する市民の皆さまのご理解、ご協力なくては成り立ちません。今回の受賞はそんな市民の皆さまとともにいただいたものと思っております。本当にありがとうございます。

（周南市美術館館長 有田順二）



福田寺川にあった石橋の図 — 西岸から上流をのぞむ —

河村純一郎 2011年

詩人まど・みちおの

原風景

4

— 記憶の中に

架かる石橋とは —

福田寺川には、カマボコ板のような御影石の一枚橋が架かっていた：

これは昭和56年、朝日新聞地方版「ふるさと」は…私の回想」にまどさん（石田道雄）が寄稿した時の書き出しです。

福田寺川とは、東川のことで、まどさんの生家あたり（現在の周南市一ノ井手、辻町、風呂ヶ迫等）で、使われていた通称です。その名は、石田家の墓のあった曹洞宗福田寺にちなんでいます。気になったのは一枚橋となつてるところです。いくら小さな川といえども、当時そんな大きな石を使っていたのでしょうか。

まどさんが覚えていた石橋は、おそらく両親、兄、妹が仕事の関係で台湾へ渡り、祖父母のもとにひとり残された時期に架かっていたものではないかと思われまふ。それは大正4年から大正8年まで、5歳から9歳までの3年半にあたります。祖母は別居後すぐに亡くなり、祖父との寂しい生活が始まります。しかしその寂しさを癒したのは、生家づたいに広がる故郷の自然でした。とりわけ福田寺川と石橋は、この地域一番の遊び場でした。

ゴリを捕まえたこと、溺れそうになったこと、ちかぶしの竹の根がむき出しになっていたこと…。その大半がこの石橋周辺の思い出です。また、お墓参りでこの橋を渡る時は異界へとつづく天橋にも思えたのではないのでしょうか。こうしてみるとこの石橋は、まどさんが遠く徳山時代に帰る入口のように思えてならないのです。

さてこの寄稿が書かれたのは、まどさんが71歳の時です。戦後は川崎市に居を構え、昭和27年に発表した童謡「ぞうさん」はすでに国民的愛唱歌となっていました。その後は、昭和43年、第一詩集『てんぷらびり』の発刊を機に自由律詩に転向し、さらに奥深い詞海想海を追求していました。

肝心の石橋はというと昭和40年代から進む護岸工事で現在のものに作り替えられました。また昭和52年には、区画整理で生家も取り壊され、両親は妹夫婦の住む沖繩に移り住みます。幼き日に見た風景や建物はいだいに姿を消していったのです。

平成21年、生誕100年を祝い「まど・みちおえてん」を開催した際、この石橋についての写真や情報を広く求めましたが、何もできませんでした。

その後、幸いにも画家の河村純一郎さんが、幼い頃にこの石橋を毎日通学されていたことが分かりました。居ても立ても居られず橋の絵をお願いしました。さすがです。画家の記憶は、寸分の狂いもなく往時の姿を再現してくださいました。

私もかつてこの橋を渡ったことがあります。橋脚は1・5メートルくらいで、石組みの間から川面が見えました。そういえば夏の昼さがり、深緑の田園と紺碧の川瀬との間を貫くその石橋は、まさに白一色の一枚橋のように光っていました。

現在、まどさん101歳。この石橋の絵を見てもらおうと思っています。そして存分に故郷のことを語ってもらおうと思っています。（周南市美術博物館館長 有田順二）



岩合さんと、まどみちおさんの描いた「ぞうさん」 2010年7月30日 美術博物館にて

この星に、
ねこがいる幸せ。



周南市誕生10周年記念 岩合光昭 写真展 ねこ

11月22日(金)～1月5日(日) 午前9時30分～午後5時(入館は4時30分まで)

観覧料／一 般1,000円(800円) 大学生800円(600円) ()内は前売及び団体(20名以上)

18歳以下、身障者の方は無料です。受付で証明できるものをご提示ください。

皆様のご要望にお応えして、癒しの決定版、ねこ、猫、CATでつづる岩合光昭写真展「ねこ」を開催します。

これは、大反響のあった2010年「かけがえのない地球いのちの輝き」岩合光昭写真展」に続く第二弾となります。

実は、前回の展覧会で岩合さんと周南市が生んだ詩人、まど・みちおさんとの素敵なエピソードが生まれました。「ねこ」展に先駆けてここにご紹介します。

まどさんといえば、童謡「ぞうさん」でお馴染みですが、そのまどさんが描いた「ぞうさん」の絵も今では広く知られるようになりました。岩合さんが、来館された際、偶然「ぞうさん」の絵との対面が叶い、後日、新聞紙上注に心温まるエッセイを寄せていただきました。

「ぞうさん」の絵は、画面全体に広がる緑をバックに、目も耳も胴体もすべてまん丸な子象が、その中央に描かれています。しかも鼻としっぽが胴体を中心一直線上で繋がり不思議なシンメトリーを醸しています。想像を掻き立てるのは、鼻でピンクの風船をにぎらせているところです。この絵については、多くのご意見をたまわりましたが、いずれも斬新なデザインをあげられ、優れたイラストというのが一般的でした。しかし一方ではその逆の何か泥臭い懐かしさや安堵感が漂う不思議な感触がありました。

岩合さんは、アフリカ、インド、スリランカ、ボルネオで象の取材を続ける世界的な動物カメラマンです。ベストショットをものにするためには、生態にも詳しくなければなりません。その岩合さんの「ぞうさん」の絵の解釈には、一応に目を見張りました。それまで動物学的に分析したものが無かったからです。

まず、「象の暮らしの中心は鼻にある」とし、鼻の役割をヒトの腕や手、時としてはそれ以上の働きをするものと強調されています。そして鼻先が白くなつて、しっかりと風船を握っているところに着目、そこに象特有の習性を見ておられます。それから誰も気づきませんでした、しっぽの状態です。象は興奮したり緊張したりするとしっぽを立てるそうです。岩合さんは、まどさんの絵は、象をよく観察し、本質をとらえていると絶賛されました。このような観察眼は、まどさんの詩心にも共通することです。まどさんの絵が安心して見ることができるのは、動物そのものの目線で描かれていたからだ、この時始めて確信しました。

すると、子象はなぜ風船を緊張して握っているのだろうか。そして次は、何のために、誰のためにと深く深く読み解いていくことが出来るようになります。まさに「ぞうさん」の絵は、多くのイメージーションと輝かしい未来を育む人生の教科書ともいえるのではないのでしょうか。

さて、まどさんの本質を見抜いた岩合さん。やはり岩合さんもヒトでは無く動物の目線でモノを見ているカメラマンです。

猫百態。「ねこ」そのものになって「ねこ」を見つめる。岩合光昭写真展「ねこ」。いよいよ11月22日開幕です。

(周南市美術博物館館長 有田順二)

注) 日本経済新聞 2010年10月1日文化欄

発行 公益財団法人 周南市文化振興財団 山口県周南市徳山5854-41 (0834-22-8787) <http://s-bunka.jp/top/>

【美術博物館】	山口県周南市花島町10-16 (0834-22-8880)	http://s-bunka.jp/bihaku/
【郷土美術資料館/尾崎正章記念館】	山口県周南市富田永源(永源山公園内) (0834-62-3119)	http://s-bunka.jp/kyoubi/

周南市美術博物館 開館20周年記念

まど・みちおのうちゅう



まど・みちお「少女の顔」
1961年8月22日

1月17日(日)
まで開催中

午前9時30分－午後5時
(入館は4時30分まで)

休館日／月曜日、年末年始
(12月29日～1月3日)

※ただし、1月4日(月)、1月11日(月・祝) 開館
1月12日(火) 休館

観覧料／一般1,000円(800円)、
大学生800円(600円)

※18歳以下無料

()内は前売および20名以上の団体

まどさんから贈られた元原稿

[illegible]

— 周南でまどさんの展覧会ができる幸せをかみしめたい —

まどさんとふるさと徳山のお付き合いがはじまって7年目の1992年。まどさんが主役の大きなステージが実現しました。

それは徳山市文化会館10周年を記念して、ふるさとの「誇り」を全国へむけて発信しようという企画でした。

タイトルは「まど・みちおこもののうたフェスティバル」。11月7日に大々的に開催しました。

これはNHKとの共催で、まどさんの全仕事を振り返るとともに、彼の童謡や詩をメインにしたコンサートを開催し童謡史の概観をたどろうというものでした。

第一部「シンポジウム」では、安野光雅、長田暁二、阪田寛夫、谷川俊太郎、山本直純らの論客が集い、まどさんの童謡と詩の変遷やその特徴を様々な角度から検証しました。

第二部「ファミリコンサート」では、眞理ヨシコ、森みゆき、山本直純、ボニー・ジャックス、大阪シンフォニカの豪華出演者により古今東西の子どもたちの歌を高らかに歌いあげました。

そしてお楽しみはこのコンサートで、まどさんがふるさとのために書かれた唯一の歌「コスモスのうた」が眞理さんによって初披露されたことでした。まどさんは、恥ずかしがり屋ではじめは出演も断られていました。そのかわりとして、私たちに贈ってくださったのがこの「コスモスのうた」です。その大切な詩に曲をつけられたのが、山本直純さん。「一ねんせいになったら」の作曲者でもあり、当時まどさんとは一番気心の知れたなにかでした。

さて、今回の「まど・みちおのうちゅう」展にあたり、ゆかりの方々からメッセージをいただくことになりました。その中に眞理ヨシコさんからこの「コスモスのうた」にまつわる心温まるエピソードが届きました。

内容は、まださんのコスモスを歌った歌はたくさんあるが、この「コスモスのうた」はまださんが、何度も書き直された最終形であること。作曲者の山本さんは、その思いをくみ詩人への敬意をこめて最高の楽曲にした

いと楽譜ができたのが本番前日であったこと。そして、ご当人の眞理さんは、「ちいさなことを歌い重ねて、おしまいには、すべての音を使ってマーチ（行進曲）になる。いつまでも終わらないしりとりのうたのようになって

いました」と音楽家としての奥深い講評に。歌手の立場からは、歌い終わって思わず隣の人を抱きしめたいくなるような歌とも――

「まじ・みちおのうちゅう」展は、ただの展覧会ではありません。このように、まじさんを愛する全国の皆さま、そしてまじさんを支えてこられた市民の皆さま、スタッフの皆さま、関わりのおあったすべての方々の気もちが実を結び、ようやく築き上げた展覧会です。

ぜひ、「まど・みちおのうちゅう」展にいらしてください。ふるさと周南でまどさんの展覧会ができる幸せを皆さまとともに分かちあえればと思います。

（周南市美術館博物館長 有田順一）

(周南市美術館館長 有田順一)

年明けは、1月4日（月）から開館します。